

# 「修道ベーシックルーブリック」と 端末の普段使いで、未来への力を育む

## 広島県・私立修道中学校・修道高校

生徒が目指すべき姿を「修道ベーシックルーブリック」に掲げた広島県・私立修道中学校・修道高校は、生徒が目的に応じてICTを使うようになることで資質・能力も高まると考え、学校生活のあらゆる場面でICTを活用している。

### 「学びのインフラ」として ICTを活用

広島県・私立修道中学校・修道高校は、2020年度、修道生として身につけてほしい「価値観」と「スキル」が示された「修道ベーシックルーブリック」を策定した。「価値観」は「世界貢献・開拓者・協働性・向上心・独立心」の5領域、「スキル」は「人間関係力・表現力・判断力・思考力」の4領域とし、各領域に2〜3のテーマを設定して、自分のレベルを高めるために必要な姿勢や行動を示している。そして、テーマごとに5段階の評価基準(図1)を設けることで、

生徒が自分の状態や、次に目指すべき姿をイメージしやすくなった。

生徒は、9月と3月に、同ルーブリックを基に自己評価をして自身の活動を振り返り、次の目標を立てる。一方、学年団は、生徒の自己評価を集計して各領域の達成度を算出。前回の自己評価からの変化を分析して指導改善を図り、PDCAサイクルを回している。

そのように、「修道ベーシックルーブリック」を教育の柱に据えている同校では、ICTを「学びのインフラ」と位置づけ、教材の配信や振り返りの蓄積、ウェブテストの実施、生徒・保護者との連絡など、教育活動のあらゆる場面で活用している。

で活用している。中学教頭の蔵下一成先生は、次のように語る。

「本校の教師が『デジタル・タキソノミー』(P.6参照)に基づき、目的意識を持ってICTを活用するのと同様に、生徒も目的や状況に応じてツールを選び、活用する経験を積み重ねることで、判断力や表現力、情報活用能力などが高

まっていくと考えます。生徒の学びの量を増やし、学びの質を高めるツールとして、ICTの活用を工夫しています」



中学教頭  
蔵下一成  
くろした 一成  
教職歴23年。同校に赴任して29年目。美術科。



高校1学年主任  
広報室  
かまた ゆうすけ  
教職歴6年。同校に赴任して6年目。社会科(日本史)。



高校1学年主任・教務部  
もりもと まさき  
教職歴15年。同校に赴任して15年目。英語科。



高校1学年主任・広報室  
かまた ゆうすけ  
教職歴6年。同校に赴任して6年目。社会科(日本史)。

図1 「修道ベーシックルーブリック」の5段階の評価基準(抜粋)



上記のように、テーマごとにレベル1〜5の評価基準が設定されている。  
※学校資料を抜粋して掲載。

※学校概要は、P.5をご覧ください。

## 教科指導 (美術・数学・英語)

### ICT活用のポイント

ポートフォリオで  
学びの過程を可視化する  
目的や利点を、生徒に説明

### 生徒の変化

「〇〇したいのですが、  
どうすればよいですか」  
と、目的意識を持った  
質問に変容

### 次のビジョンを描く 「ネタ帳」として活用

美術の授業では、作品の制作過程での気づきや課題、完成作品の画像などを残すポートフォリオとして、「Classi」(\*)のアルバムの機能を活用している(図2)。美術科の藏下教頭は、そのねらいを次のように語る。

「アルバムの機能は、その時々々に考えたことを残す習慣をつけるネタ帳として使おうと、生徒に伝えていきます。蓄積が多くなっても、手元の端末ですぐに確認できますし、自分の過去を振り返ることで、次のビジョンが見えてくるもので

す。取り組みを進めるうちに、生徒の質問が、『次に何をすればよいですか』から、『〇〇したいのですが、どうすればよいですか』に変わりました。メタ認知能力や向上心などの高まりを感じます」

また、単元ごとに「修道ベシックルーブリック」の中から育成を目指す資質・能力を明記し、作品の完成後、自己評価と相互評価を実施。アンケート機能で集計し、結果を授業改善に生かしている。例えば、今年度の高校2学年で取り扱った、『オルターピース』を題材に平和への願いをテーマとした単元では、「世界貢献」の自己評価があまり高くなかった。

図2 美術科 生徒のポートフォリオ(例)



この生徒は毎時間、制作途中の作品の画像もアルバムにアップし、次時に取り組もうと考えていることを入力している。  
※学校資料をそのまま掲載。

「単元を通して生徒が世界貢献について考えを十分深められていなかったことが、評価結果の数値化によって明確になり、主題を繰り返して発信する重要性に気づくことができました」(藏下教頭)

### 端末を使う意義を生徒と共有し、 いつでも使える環境に

数学科の野上知宏先生は、1トピック1分〜1分30秒間の動画を作成し、クラウド上で生徒に配信。授業中のグループ活動時の教材などとして活用している。1回の定

期考査の出題範囲分で、動画は約80本、約90分間となる。定期考査前には、動画を何度も見返せば理解が深まることを、生徒に繰り返し伝えていくと、野上先生は語る。

「私自身、動画を何度も見返し、説明の仕方や図の示し方などにおける改善点を見いだして、次の動画作成に生かしています」

英語科の森元雅貴先生は、生徒に端末を使う意義を説明した上で、授業中の端末の使用に制約を設けていない。生徒は、必要に応じて端末で調べ物をするほか、森元先生の指示がなくても、クラスメートとクラウド上で英作文や和訳を共有して学び合っている。

「端末の使用を制限しなければ、生徒が学習以外のことで端末を使用するのではないかといった声もあります。しかし、端末を使う場面を限定してしまうと、『今、知りたい』という生徒の意欲を削ぎかねません。大切なのは、端末を使う目的を生徒としっかり共有することです。それができている本校では、生徒が主体的・協働的に学ぶ姿がよく見られます」

\* 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。

# 「総合的な探究の時間」

## ICT活用のポイント

動画制作や事務作業など、ICTを総合的に活用する課題を設定

## 生徒の変化

優先課題を判断しつつ、作りたいものを粘り強く追究

### 資質・能力を総合的に育む活動として、動画制作を課題に

22年度の高校1年生の「総合的な探究の時間」では、「広島文化」をテーマとした3分間の動画制作を課題とした。生徒は8人ずつのグループを組み、ディレクターや記者、カメラマンなど、役割を分担。各グループ、食や防災などの7領域から1つを選択し、動画の内容を検討した。7月下旬には、テレビ局員から取材や動画制作の方法について指導を受けた上で、調査や取材を行い、夏季休業明けにテスト動画を制作した。各学級のクラウド上でテスト動画を共有

して感想や意見を述べ合い、テレビ局員からの講評も踏まえて、再取材や動画の修正を行い、10月末の文化祭で発表した。

調査や取材依頼、撮影・編集などの各工程ではICTを活用。夏季休業中は、メンバーがそれぞれ作業を進め、クラウド上で成果物を共有しながら活動を進めた。

「動画制作は、『判断力』や『表現力』など、『修道ベースシックルブリック』を総合的に伸ばすための課題として設定しました。9月の中間発表でテレビ局員から酷評を受けて、かえって火がついた生徒がいましたし、グループ内で意見の相違があっても粘り強く議論

し、自分たちが作りたいものの制作に没頭していました」(野上先生)

### 社会で求められるICTスキルを踏まえて課題を検討

動画制作では、「修道ベースシックルブリック」の中でも「判断力」の育成に重点を置いた。テレビ局から著名人の講演を提案されたが、それを断ったのは、生徒が事前知識のない状態で、訴求したいテーマを自分たちで見つけることから始め、取材先も自分たちで見つければ、自身で判断する場面がより増えると考えたからだ。

22年9月に実施した「修道ベースシックルブリック」の自己評価では、「判断力」にかかわるテーマの「優先課題及びその解決策を的確に判断して行動に移す力」が、前回の3月調査に比べて飛躍的に向上していた(図3)。

「活動中、教師は見守りに徹し、生徒が自分の判断で動けるようにしました。課題に真剣に向き合い、何度も壁にぶつかりながらも乗り越えた経験が、『判断力』の向上

図3 自己評価の結果(抜粋)

領域	ルーブリックテーマ	前回との差異
思考力	自分の選択がどういう結果を引き起こすかを推測する力	0.08
	情報を体系的につなげて因果・関連性を考える力	0.09
	物事を時に具体的に、時に抽象的に思考できる力	0.09
判断力	優先課題、及びその解決策を的確(論理的)に判断し行動に移す力	0.2
	大局を見据えて判断する力	-0.01

※学校資料を基に編集部で作成。

という結果につながったのだと思います。その中で、ICTは明確な目的の下で活用することで、間接的ですが、活動を支えるものとなってしました」(野上先生)

卒業生の著名人を主人公にしたドラマ仕立ての動画など、生徒の「思考力」や「表現力」の向上が見られる作品ばかりで、教師を驚かせた。

「動画投稿サイトが一般的に活用される中、日常生活や仕事でも、動画制作やプログラミングなど、より高次のスキルが求められるようになっていきます。そうした観点からも、課題設定が重要だと考えています」(藏下教頭)

## 学級運営

### ICT活用のポイント

学習時間を記録しやすい  
仕組みにした上で、  
学級ごとに学習時間を  
可視化し、学年内で共有

### 生徒の変化

1年次から  
家庭学習習慣が定着し、  
記録の内容も具体化

### 環境整備と教師の声かけの 両面から学習習慣を意識づける

生徒・保護者との連絡や家庭学習の把握にも、「Classi」を活用している。その際に留意しているのは、生徒に任せっ放しにしないことだと、高校1学年担任の鎌田祐介先生は説明する。

「連絡事項を確認しましょう」「学習時間を入力してください」などと口頭で伝えるだけでは、行動に移さない生徒がいます。行動を習慣化させるため、活用のルールを設けた上で、担任が繰り返し声をかけています」

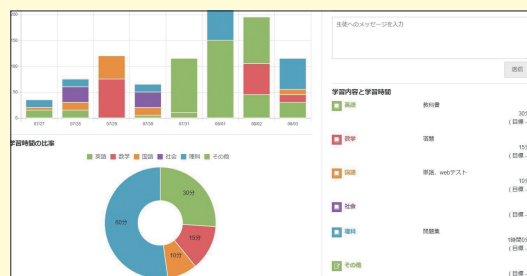
鎌田先生は、朝のSHRで、生

徒全員が「Classi」を開く時間を

確保。連絡事項を確認したら、「見ました」ボタンを押すルールにしている。押していない生徒には、端末上で促すとともに、実際に声もかけるなど、閲覧が習慣化するまで粘り強く働きかけている。

夏季休業中は、家庭学習の習慣化に向けて、高校1年生全員に、家庭学習時間を「Classi」に入力させた(図4)。担任は入力状況を毎日確認し、入力していない生徒には入力を促すメッセージを、入力した生徒には励ましのコメントを送信。さらに、学級ごとの学習時間の総計を1年生のグループにアップし、1年生全員が見られ

図4 家庭学習時間のグラフ(例)



※学校資料をそのまま掲載。

るようにした。すると次第に、毎日学習時間を入力する生徒が増え、学習習慣が定着していった。鎌田先生は、教師の粘り強い働きかけが、「向上心」「独立心」を喚起したと感じている。

「生徒の中には、学習の記録として活用しようと、学習した内容まで入力する者もいました。自分でやり方を工夫できる生徒は、自分の学習スタイルを振り返り、課題を見つけて、主体的に学習に取り組めます。その積み重ねが、大

自身で学びや仕事の質を振り返る習慣として定着することを期待しています」(鎌田先生)

**目標は、生涯蓄積できる  
ポートフォリオの構築**

今後は、教育活動で活用しやすいソフトウェアを精選していく。「利用するソフトウェアが多いと、アカウントやパスワードの管理が難しくなり、生徒は混乱します。教師がICTに頼りすぎることとで生徒を振り回さないよう、各ソフトウェアの効果を検証したいと考えています」(野上先生)

大学や社会へ続く「人生のポートフォリオ」を、生徒が蓄積できるようにすることも目指したいと、藏下教頭は語る。

「現在使用中のアカウントを使えるのは高校までです。大学進学後の活動実績や就職後のキャリアなど、生涯にわたって自身の学びを蓄積し、日常的に振り返って自分の課題を発見することで成長していけるようなポートフォリオを構築すべく知恵を絞っていきます」